昨年の反省を踏まえた開花期防除の要点

これからかんきつ類は開花期の防除を迎えます。ハナモグリ、ケシキスイ、アザミウマ類の訪花昆虫や灰色かび病菌による擦過傷はケロイド状となり、果実肥大にしたがって拡大していき、外観上の大きなマイナスとなります。瀬戸内では品種が多種多様なため開花期も幅があり、適期防除に努めるとはいえ、そもそも適期って？と毎年思います。そこで、今回は開花期の防除についてまとめます。

殺虫剤は早めに、殺菌剤は遅めに（一般論としての適期防除）

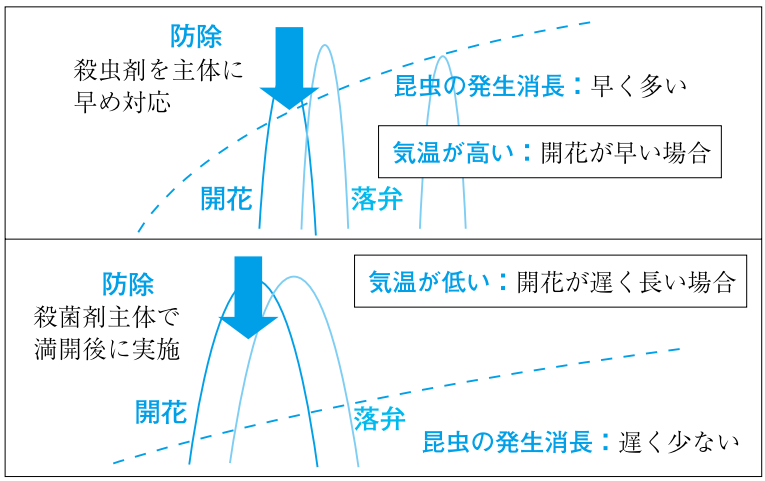
訪花昆虫は、花の花粉や蜜を食べようと集まってそこらじゅうを這い回るときに、尖った鉤爪などで柔らかな幼果の表面を傷つけます。防除対策としての殺虫剤に、これらの虫を一定期間殺してしまう力は無く、どちらかというと開花の期間、これらの虫が近づかないようにする働きがあります。そのため訪花昆虫対策としては早め対応、５分咲き程度での散布が効果的です。一方病気対策では、子房（果実）の表面にある程度の薬剤付着が必要ですから、満開期以降の散布が必要となります。品種によって開花期にずれがありますので、薬剤の効果を最大限引き出すには、時々に応じてそれぞれの薬剤を散布していかねばなりません。ただしどの薬剤も花（子房）に付着すればよいので、葉裏までべったり散布する必要は無く、少量の薬剤を樹冠外周の花を狙って散布すればさほど薬液を用意しなくても大丈夫のはずです。

なるべく1回ですませたい（防除対象と散布適期の考え方）

とはいえ、薬剤散布はなるべく1回で済ませてしまいたい、というのは皆さんからしばしば伺う意見です。ではどうするか。今年の開花状況は本稿執筆時（3月末）では全くわかりませんが、近年の傾向として好天が続き一気に開花が進むようなら、病気よりも訪花昆虫の多発生のほうが懸念されますので、我が家の主力品種の開花が5分程度になったところで殺虫剤を中心に散布するのが良いでしょう。一方で昨年のように春の到来が遅く、花冷えしてだらだらと開花が続くようなら、昆虫の発生が遅れ、開花期にはまだ少ない傾向にありますので、主力品種の満開～落弁期に殺菌剤を散布するのが良いと思います。ただしこれはあくまで1回で済ますときの考え方であって、最大の防除効果を保障するものではありませんし、何かを我慢しなければならない結果も生じると思います。

せとかは忘れずに黒点病対策

昨年は露地せとか等で黒点病菌の初期感染により、果頂部周辺にそうか病のそばかす症状やカイガラムシにも思える小さなかさぶた状の茶点傷害が多発し、整品率を著しく悪化させてしまいました。特に黒点病に弱いせとかでは、満開期防除で黒点病対策を講じる必要があります。今年の防除薬、フロンサイドSC、ロブラール水和剤、ナリアWDGは、黒点病に対して登録があるものの、充分とはいえません。これらを利用される場合はジマンダイセンの加用をお勧めします。または在庫でマネージMをお持ちの場合はこちらを利用してください。

今、畑で起こっていることを良く観察しよう

防除は予防、と上島の方々はよく口にされます。たしかに早め早めの対応に越したことはありません。一方で「結局今何をやったらええん？」防除暦には作者の意図があって、なるほど良く考えられているなあと思います。しかし防除暦の暦はあくまで目安であって、現在我が家の山での動きを保障するものではありません。季節の移ろいや花の咲き具合、虫の様子などから、本当に必要な時期に必要な作業を行うことが、結局最も望ましい結果を生みます。